

セシリア（偽）

刀祢梨子

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ロリっ娘セシリアに転生あるいは憑依したオリ主がなんかいろいろと可笑しいIS世界に悩まされる話。

たぶん続かない。

# 目次

なんか歳も出生も名字も違う。それはも	
う別人では？	1
これが世界の修正力か……	11
私の安息の地はどこ？ここ？	18



なんか歳も出生も名字も違う。それはもう別人では？

私、セシリア・ウォルコツトは唐突に前世の記憶とでもいうべきものを思い出した。きつかけは恐らく、目の前で流れているテレビ番組。

先日、日本に向けて多数のミサイルが発射され、そしてそれがすべて「たった一機」によって撃墜されたという、後に白騎士事件と呼ばれるようになる事件についての緊急報道だった。

ここが前世の記憶にあるライトノベル、インフィニット・ストラトスの世界だとか、私の名前がヒロインの一人にそっくりだとか、そんなことより重大な事実には私はずいづい気がついてしまった。

私の記憶が正しければ、白騎士事件は原作開始の10年前であり、ニュースによれば今がちょうどその時ということになる。それはつまり原作は現在より10年後ということになる。

しかしここで問題が一つ。私、現在2才である。原作始まる10年後にはまだ12才である。

転生もこのようになって普通同年代になるのがテンプレってものじゃないか？

よしんば年が違ったとしても、せめて日本に生まれれば可能性の一つや二つはあったかもしれないが、私が生まれたのは遠く離れたイングランドイギリスのロンドンである。

これ、原作に絡めたくない？

——いきなり飛んで6年後

と、当初は思っていたのだが、原作でしょっちゅうイベント襲撃事件が発生していたことを考えれば、むしろ原作にはかかわらない方が安全なのではないだろうかと思うようになった今日この頃。

そして原作組、というか主人公と3歳年齢差があるならばよっぽどのが無ければ関わることも無いだろう。

原作に関わることが無いならば、安心してISというロマンの塊に手を出せるというもののだ。

空飛ぶロボットなんてものが目の前にあって、手を出さないとという選択肢があるだろうか、いや無い（反語）。

幸いにも両親が経営するバーナード&amp;amp;amB；フェリクス財団Fは欧州随一の大企業にして、ISを特集したテレビ番組でも紹介される程度にはIS開発に力を入れてい

る。

現在8才児の私をISに触らせてくれるかという問題もあるが、両親共に親バカっぽいところがあるし、可愛い娘からの可愛い可愛いおねだりビームで崩落するであろうから問題ない。多分。まあ、今がだめでも、プライマリ・スクール小学校を卒業する頃——原作が始まるころ——にはお許しもでるだろうし、とりあえず今日の夕食時にでも頼むだけ頼んでみよう。

BFFとかいう社名がどこかで聞いたことあるような気がするが、多分気のせいである。

と、言うわけで翌日。やって参りましたBFF本社ビル。

本社ビルなので当然ここにISはない。本物のISを早くこの目で見てみたかったが、その前にうちの会社についてのお話だな、とお父様2番目偉い人に言われては従う他ないのである。要するに準備してる間にちよつと基礎知識入れとこうということだな。1番偉い人？もちろんお母様ですが？ちなみにそのお母様は私が見学に行くのに万が一はおろか億が一もあつてはならない、と言ってIS開発部の施設に抜き打ち視察に行つてしまわれた。すまない、IS開発部の人たち。

会社内を練り歩きながら始まったのは、お父様による会社案内もとい会社説明。

まあ色々とは話があったのだが、ざっと纏めると、マッスルトレーサー、通称MTと呼ばれる人型作業機械と、そこから派生したC o r e d M T、そこからさらに派生したアーマードコア、通称ACと呼ばれる軍事産業が主な事業だとのこと。

物凄く聞き覚えがあるような気がするが気のせいである。気のせいだったら気のせいである。

しかしそのACもISが登場したことによって過去の産物になりかけているらしい。現状ISが、というよりISのコアが篠ノ之博士にしか作れない完全なブラックボックスな上、そのコアが今現在400個程度しかないとため量産の観点からACのほうが兵器としては若干優勢ではあるらしいが。

で、そこでB F F所属の偉い人だけか研究者だけがあることを思い付いてしまったらしい。

そう、ACとISの融合である……バカじゃねえの？ACの時点ですでに地上に限定されるとはいえ第一世代IS実用に漕ぎつけたに匹敵する機動力を持つのに、そこにISの補助機能やら3次元機動力をぶっこももうという計画である。名付けてネクスト計画。これ考えたの絶対私転生者の同類だよな？

で、明日見学に行く研究所で開発中なのが、その計画の第一号機でありB F F初の第二世代機である「047AN」で、起動試験は既にクリア済みで、今日は歩行・走行試

験の真つ最中、順調であれば明日は飛行試験をするとのことだ。

各国がすでに第三世代の開発に取り掛かっている中今更第二代というのも出遅れている感があるが、いかんせんうちの会社はACに力を入れていたため、ISの技術は正直からつきしなのだそうだ。代わりに人型兵器に持たせる大型ライフルの技術や、人型兵器をかつ飛ばす推進技術に関しては抜きんでているが。

で、その結果がACとISの悪魔合体である。合体事故とも言う。

……やっぱりこれ考えたの（以下略）。

とりあえず、緑色の粒子が舞っていないことを祈ろうではないか。

はい、そんなこんなでやって参りました、BFF第4研究所の野外試験場、を見渡せる管制室。

今日の同伴はお母さまである。お父様は昨日一日私を案内している間に貯まった書類を処理しているとのこと。すまないお父様、娘の我がままのために犠牲になってくださいまし。

あ、ちなみに第1、第2研究所はACとACの武装開発を、第3研究所はIS関連技術の研究をしているとのこと。PICとか量子化とかハイパーセンサーとかね。

うーん、それにしても機体が遠い。機体のサイズが分からないからいまいち距離が計

りづらいが、目測でざっと10 kmから15 kmといったところだろうか。地平線ギリギリに点が見える程度である。双眼鏡を使ってもやつとの距離だ。というか広いなこの試験場。

まあ、普通に考えて社長と社長令嬢ご一行が、砂塵舞う上に何が起墜る落のか分危から険ない飛行試験のただ中、試験場に出て間近で見学とかあり得ないのだけでも。そもそも整備士も研究員も車内か屋内に居て試験場に立つてるような人は一人もいないのだけでも。「始めてください」

そんなことを考えながら双眼鏡を覗き込んでいると、すぐ横に立つお母様が試験を開始するよう開発の偉い人っぽい人に声を掛けた。たしか開発主任とか紹介された気がするが忘れた。開発室長だったかもしれない。

それにすぐに返事した開発主任だか開発室長だかが管制塔に詰めている職員たちに開始を告げ、同時にオペレーターがパイロットへ無線を繋ぎ試験が開始された。

「こちら管制塔、047AN、飛行試験を開始してください」

『了解。飛行試験を開始する』

オペレーターと無線機の向こうから聞こえてくるパイロットらしき女性の声との短いやり取りの後、それまで地面に直立していた全身装甲フルスキンタイフのIS、もといネクスト047ANは宙へと浮き上がった。

「047AN、浮上を確認。問題が無ければホバー移動へ移行、指定座標まで移動してください」

『PIC正常、姿勢制御、スラスタ稼働、問題なし。指定座標まで移動するわ』

オペレーターとパイロットのそんなやり取りを聞き流しながら、私は宙を滑るように移動していく機体の様子を双眼鏡越しに、食い入るように見つめていた。

ネクストはACの技術を流用しているため、通常のISと異なり胴体部分にパイロットがすっぽりと収まるようになっていて、通常のISがせいぜい2、3メートルなのに、対し、ネクストは5メートルを優に超える巨体だ。通常のACよりは小型になっているとはいえ、元が全高10メートル近いACというだけあってISにあるまじき巨大さを誇っている。むしろ、元が10メートルもあるものを機能据え置きどころか向上させたうえで半分のサイズ——体積で言えば8分の1——まで落とし込んでいるというのは驚愕に値するものだ。BFFの技術者がすごいのか、ISに使われている技術がすごいのか、あるいはその両方か。

そして、そんな巨大な人型ロボットが実際に動いているというのが、心をくすぐられるようななんとも言えない感覚を呼び起こす。

人型ロボットに乗るというのは全世界のロボットオタクの夢ではなからうか。残念ながらACは軍人しか乗れないし、ネクストに至っては女性でBFF所属のベテランパ

イロツトしか乗れないが。

とはいえ私はBFFの社長令嬢であるし、我がまま言えば乗れそうな気がする。流石に試験中の試作機には乗せてくれないだろうが、リリース後ならワンチャン。

なんて、私がそんな思考に耽っている間にも試験は進行し、試験内容はついにネクストの目玉である大出力ブースターの稼動試験へと移っていた。しまった、どんな試験してたかほとんど見てなかった。

「これよりオーバードブースト及びクイックブーストの試験へ移ります。047ANはその場で待機。調整を終えた整備班は至急、付近のシエルターへ退避してください」

んんー、何やら物騒な単語が聞こえてきた。

それから暫くして、今までは試験場内に待機していた、整備班とやらを乗せていたであろう装甲車やトラックが一斉に金属製の頑丈そうな建物へと入っていくのが見えた。ちらつと見えた入口の扉は、軽く1メートル以上厚みがありそうな、シャッターとかドアとか言うより、隔壁とか防壁とか言った方がよさそうな物々しさだった。

そして試験場からすべての車両が退避し終わるのを見届けてから、次は管制塔の隔壁が閉じ始めた。広々と開けられていた管制塔の窓すべてを覆うように、上下から金属製の防壁がせり出してくる。

防壁が閉じ切ると同じくして天井から降りてきた複数の大型ディスプレイには、閉

ざされた視界の代わりとでもいうようにネクストを写したカメラ映像や各種レーザー情報が表示されていた。

なにこれカッコいい。

「地上待機班の退避を確認、隔壁閉鎖完了。映像、レーザー共に正常。予定通り10キロ直線オーバードブーストから行きます。準備はよろしいですか？」

『問題ないわ』

パイロットからの開始の声と共に、機体背部に備え付けられた大型ブースターに光が集まっていく。ブースターに集められたエネルギーが光となって漏れ出しているのだろうか。

1秒程かけて眩いばかりのエネルギーをため込み、そして次の瞬間、甲高い駆動音と空気を引き裂く音を置き去りにしながら、カメラの視界の外へと一瞬で消えていった。ネクストが10キロを移動し終わる頃にはカメラでもその姿を捉えることが出来たが、逆に言えばネクストが止まるまでその姿を捉えることはできなかった。とんでもない速度である。

「31秒ジャスト、時速にして約1200キロ。理論値には及びませんが、実用圏内かと」

「試作機でここまで出るなら十分でしょう」

開発主任（暫定）とお母様の会話にちよつと気が遠くなつた。

追加装備なしで亜音速出てる時点で既にISの域を超えてると思います。うちの会社はどこを目指してるんだ。

「さて、まだ試験は終わっていないけれど、私たちはここで失礼するわ。帰りますよ、セシリア」

「はい、お母様」

まだクイックブーストが見れていないが、残念ながら帰らねばならぬらしい。まあ、今日はあと一時間後にピアノレッスンやらダンスレッスンやらが控えているから仕方ない。

「それではみなさま、本日はありがとうございました」

片足を少し下げ、スカートの裾をちよつとつまんで軽く膝を曲げ、最近様になつてきたと自負しているカーテシーをペこりと。退室する前に一応挨拶してから、私は管制塔を後にした。

とりあえず、緑色の粒子は舞っていなかったから大丈夫だろう。

……Maybe.

## これが世界の修正力か……

私がこの世界に生を受けてから早いことでもう12年が経った。ISに本格的に関わるようになった8歳のあの日から4年になる。

両親の経営する会社、BFFが開発したAC型のIS、ネクスト「047AN」は大成し、ラファール・リヴァイヴと並ぶシェアを——その特性から、競技用ではなく事実上の軍用として——獲得し、ACも数を揃えればISをも墜とすことができる。軍人方々、主に男性たちに大人気。先月には新型ネクスト「063AN」の先行試作機も開発が完了し、各種データ取りや調整の後、問題がなければ正式にロールアウトとなるだろう。そんなこんなでわが社が絶賛事業規模を拡大している最中、世界初の男性IS操縦者が見つかったというニュースが飛び込んできた。

ウチの会社はどちらかというとACに力を入れているため、ISに関してはそこまで熱心に研究はしていなかったのだが、さすがに世界初の男性IS操縦者という一大ニュースともあれば食いつかざるを得なかったらしい。

まあ、要するに何が言いたいかといえます。

私は今、IS学園にいます。



思わずため息が溢れた。まったくもって入学初日から気が重いことこの上ない。

察しのいい人ならもうお気づきであろう。ここはIS学園が1年1組であり、しかも学園にただ1人の男子の居るクラスである。そう、我らが超鈍感朴念仁難聴系ハーレムイケメンクソ野郎もとい織斑一夏の居るクラスなのである。おつと失礼、お口が悪くなつてしまいましたわ、ごめんあそばせ。おほほ。

「はあ……………」

まあつまりこのクラスはライトノベル「インフィニット・ストラトス」の舞台となる1年1組なのである。原作にがつつり巻き込まれたで候。

15歳の高校生たちの中に1人紛れ込む12歳小学生女兒。しかも金髪碧眼の白人の少女である。目立つことこの上ない。最前列の男子ほどではないにしろ、視線が刺さるものなんというか居心地がわるい。つらい。

絶望した！年齢が違つても結局巻き込まれたという現実に絶望した！

事の発端は先月のことだ。

初の男性IS操縦者が発見されたというニュースが世界中を騒がせている中、政府のIS管理局——正式名称は何か違つたと思うけれど忘れた——の偉い人が唐突に家に来て来てこう言つたのである。セシリアさん4月からIS学園に行つて下さいお金

だしますから！（意識）と。そう、宣ったのである。

勿論私は全力で拒否した。そもそもまだプライマリースクール小学校も卒業してないし、日本の高校であるIS学園への入学要項を満たしていないのではないかと。

そして何と政府のお偉い様、特例で飛び級で卒業して行けるようにしとくよ、IS学園はグローバル対応で飛び級でも入学できるからへーきへーき！（意識）などどほぎきやがったのである。Holy Shit！

それでもイヤイヤの嫌ー！とだだを捏ねてみたのだが、いかんせん両親ともいい経験になるだろうとか何とか言って乗り気だったので、結局私はIS学園へと輸出されることになったのである。拒否権はなかった。うぼあー。

これから何度もイベントと言う名の襲撃事件やら暴走事件やらが発生しまくり、そして当然のように巻き込まれる未来を想像し、また気が重くなった。そのうち胃に穴でも開くんじゃなからうか。小学生で胃に穴とか誰得。

まあ、そんなこんなで絶賛絶望中の私の目は、打ち上げられ1週間経過したマンボウのつぶらな瞳のごとく濁りきっているのだろう。ハイライトとか消えてるに違いない。ロリっ娘のレイプ目だぞー！喜べよ！……喜んでるんじゃねーよこのロリコンどもが！はははははは！はははは……

「はあ………」

これはヤバい。ヤバい感じに情緒不安定になってる。本格的に精神がヤバい。

もう、帰っていいかな。

うあ、あー。

「やっぱり辞退するっていう選択肢は……」

「認めん」

「……じゃあ、それで良いです」

どこかへ旅立っていた意識が戻ってきて最初に耳に入ってきたのは、いつの間にか教室にいた織斑先生と織斑一夏のやり取り。ここまでの会話が完全に記憶にないあたりそうとうキテるようだが、とりあえず今は織斑先生の話に集中しなければ。聞いてなかったとか言ったらコロコロされちゃうかもしれない。

とりあえず、今の短いやり取りと原作の流れから察するに織斑一夏がクラス代表を押し付けられる流れの所だろう。セシリア私が絡みに行っていないからクラス代表争奪戦はなしで

織斑一夏がしぶしぶ引き受けたというあたりか。

「ウォルコットも異存ないな」

え。

「え」

「ないな？」

ひえっ。

小学生相手に殺気飛ばすとか止めてください死んでしまいます。乙女の尊厳が決壊してしまいます。というかちよつと漏れたかもしれない。

え、まってまって。何、何の話。何が起きているの。何で私に話が振られたの。

よく分かんないけど取り敢えず返事しとかなないとあの殺人出席簿アタックが飛んで来るかもしれない！それはイヤだ！私はまだ死にたくない！

「はい、異存ありません！」

「うむ」

私の威勢のいい返事に満足したのか、織斑先生は一つ頷き、話を続けた。

「では、クラス代表は織斑とウォルコットの試合の結果で決めることとする。試合は来週土曜、第3アリーナで行う。以上でHRを終わる」

ほえ？

クラス代表……試合？

なんで  
?!?!

うっ、お腹が……。

## 私の安息の地はどこ?ここ?ここ?

入学直後ということもあり、最初の一週間は授業らしい授業はあまりなかった。精々が I S に関する基礎知識や、中学の学習範囲の復習程度だ。もちろんこの間まで小学生だった私は習っていない範囲である。しかも国が違うせいで学習カリキュラムまで違うという二重苦。前世知識というアドバンテージはあるが、如何せんほとんど忘れていたので食らい付いて行くので精一杯だ。まあ、件の織斑何某は参考書を電話帳と間違えて捨てるなどという原作通りの大ポカをやらかしているようだったが。

で、特にこれといった出来事もなく日々は過ぎていき、本日は土曜日、クラス代表決定戦の当日である。鬱だ……。おうちかえりたい。

織斑<sup>世界最強</sup>先生に名指しされた以上逃げることはできないし、むしろ逃げたほうがひどい目に合うのではなからうか。一応社長令嬢の仕事じやねーぞ——もあるわけだし、ちょうどという仕事——よく考えたら社長令嬢の仕事じやねーぞ——もあるわけだし、ちょうど良かったと言えばちょうど良かったのだろう。私の精神衛生はよろしくはないが。

そんな今にも胃痛で倒れそうな私は現在、整備室へ向かって重い足を動かしていた。というのも、織斑何某と試合をすることになったと一応本社<sup>実家</sup>に報告したところ、本社

から新型の武装が昨日届いたのだ。突貫作業で作ったとかいう不穏なセリフも一緒に届いた。私の精神がガリガリゴリゴリと削られていつている音が聞こえる。

その届いた武装を私の専用機に装備するためと、織斑何某の専用機となるはずのIS「白式」は、ブレオンとかいう偏った機体だったはずなので、対ブレオン用にチューニングしておこうという魂胆である。まあ引き撃ちのためにバックブーストに推力を多めに振り分ける程度だが。

なぜ当日というギリギリになってからそんな事をやろうとしているのだろうか私は。

というわけでやってきました整備室。のある棟の横の空き地。

いや、追い出されたとかではなく、単純に整備室の空間が足りなかった。IS学園に支給されているISは打鉄やラファールリヴァイヴといった通常の競技用ISのみで、当然のことながら軍用のネクストは配備されていない。

で、そうなるも整備室も競技用ISのサイズに準ずるわけで、天井までの高さか3メートルほどしかなかったのだ。

私の専用機、アンビエントは元であるネクストよりは小さくなってはいるが、元がデカイためその全高は5メートル近くもあるし、肩部武装も展開すればとさらに全高は高くなる。

とまあそういうわけで、整備室内で展開できそうもなかったので、一応近くにいた教員に許可を取ってからこの空き地を占拠した。

なんか整備室のドアの陰から水色が見えているような気がするが、特に見られて困るようなものはないので問題はない。設計を盗まれたところで、ISのPICの制御可能質量を余裕でぶち抜いていくネクストの頭おかしい設計を盗んでどうするんだというのもある。

さて、本社から送られてきた新型武装とやらはいったい何でしょうね。

用務員さんにトレーラーで運んできてもらったコンテナを空いているスペースに適当に下ろしてもらい、電子錠を手早く解除する。

解除。

解除……。

解除………。

いやロック多いな?!

いつものPINコードに加えワンタイムパスワードが送られてきたのはまだわかるが、指紋認証に静脈認証、光彩認証に声紋照合と考える限りの生体認証がついてやがる。いったい何を送って来たんだ、あの紅茶ジャンキーな開発室は。というかいつの間私の生体データを取ったんだ。コワイ。

無駄に多い生体認証を解除し終わると同時にコンテナのドアが音を立てて開き、充填されていた炭酸ガスが噴き出し、あたりに薄く白い煙が漂う。

これはあれだな、開発室の奴ら、ただかつこいいからとかいう理由でこんなひち面倒くさいシステムにしやがったな。無駄な予算使いやがって。後でお母様に言いつけてやる。

どこからか「ヤメテお嬢様！」という声が聞こえた気がするが、そんな幻聴は頭の隅に追いやって肝心のコンテナの中身の確認に移る。

「型式番号067ANLR、アンビエント用試作レーザーライフル……ですか。」

うちの会社はレーザー系技術はからつきしだったと記憶しているが、何か進展でもあったのだろうか。そういえば本国で開発中の第三代、ブルーティアーズは偏向レーザーが主武装だったか。

……もしかして、私がこつち来た見返りにブルーティアーズのレーザー技術の開示を求めたのかなのか？うーん、陰謀を感じる。お母様は親ばかだけど、そういうところ抜け目ないというか容赦ないというか。

まあいいや、ロック解除後に追加で送られてきた資料によれば、BT兵器の偏向能力とかいう要らん仕様は捨て去り、レーザーと言いつつビーム兵器みたいな特性だったのをレーザーの名に恥じない弾速に仕上げました。とのこと。意識ではなくそのままそ

う書いてある。うちの会社の規律はどうなってるんだ。

資料のカタログスペックを見る限りはまあ、私の知るリリウムレーザーとだいたい同じような性能と考えると問題ないか。

で、案の定というかなんとというか、バススロットが足りなかった。打鉄やラファールほどではないとはいえ、一応第二代IS故にバススロットもそれなりの空間があったはずなのだが、例の装置がスロットを殆ど占有しているせいで武装をたつた6種類積んでいる現状でカツカツだった。

そこにこのレーザーライフルとかいう明らかにバススロットを喰いそうな装備である。そりゃあスロットも足りなくなるといふものだ。

例の装置を下すわけにもいかず——というかACコア下の空間に埋め込まれるように搭載されているので簡易整備で外せるような代物ではない——、結局、バズーカやらキャノンやらスナイパーライフルやら射突型ブレード——いつの間にかこんなもの乗せやがった——やらといったブレオン相手に向かない武装をすべて下ろし、実弾ライフル1丁とミサイルポッド1セットに試作レーザーライフルを加えて合計3種類だけという第二代ISにあるまじき武装数となってしまった。

まあ、例の装置は半ば第三代兵器みたいなものだし、というかも第三代名乗っていい気がするんだけど。まあいいや。

あとは武装を変更した分、各部のパラメータをちよこつと調整すればおしまいである。一応申し訳程度とは言え稼働データも送られてきているので、実射時にそこまで大きく逸れるなんてことはないだろう。

開発部のイカレ具合に頭を抱えながらも、正午になるころには簡易整備を終え、私は昼食を取るべく食堂へと向かった。

で、案の定出くわすわけですよ。これは発見される前に退散するしかあるまい。今日はお昼ごはん抜きか……。

あ、目が合った。オワタ。

「あ、オルコットさん！珍しいな、オルコットさんが食堂に来るの。」

いやあああああ。話しかけられた、メス堕ちさせられる！いやあああああああ。

……失礼、取り乱した。

しかもこの男、私の苗<sup>セカンドネーム</sup>字めつちや間違えたまんま連呼してやがる。これでは無視もできないではないか！というか隣のポニテ女子めつちやにらんでくるううう！こわあああ！

とりあえず苗字だけ訂正して逃げよう。

「Mr. 織斑、オルコットではなくウオルコットです。お間違え無きよう。それにお二人のお邪魔をして馬に蹴られたくはありませんので、私はここで失礼します。」

口早に苗字を訂正して、暗に人の恋路は邪魔しないと宣言してポニテ女子のロックオンを回避しつつ、この場から離脱することができるといふまさに天才的なプラン。というかこんな早口でまくし立てたのは生まれて初めてかもしれない。よく噛まなかった、セシリア偉い。

ちらりと横に立つポニテ女子を見ればまんざらでもなさそうな表情。よし、危機一つ回避。

「……?今日は競う相手とはいえ、クラスメイトなんだし、折角だから一緒に飯食おうぜ。俺も箒も邪魔だなんて思わないからさ。な、箒。」

「……………うむ。」

おい、織斑あああああ!この、この唐麥木!なんも理解してねえ!知ってたけど!ポニテ女子がすごい顔してる!すごい顔しながらしぶしぶうなずいてるから気づけよおおおお!返事するまでにめっちゃ間空いてんじやねえか、気づけよおおおお!おおお!

しかもポニテ女子そこで頷くんじやねえよ!邪魔者は排除しろよ!断れよ!断ってくださいお願いします!

ぐぬぬ、しかしここで断るのもなんか感じ悪いし、ぐぬぬ。仕方ない。

「……はあ、仕方ありませんね。ではMr. 織斑、ご一緒させていただいても？」

「おうー！」

ここは下手に断ることに労力を費やすより、さつさと飯食って退散が賢い手段というものだ。べつに諦めたわけではない。ないつたらない。

にしてもこの野郎、こつちの気も知らないで能天気にはらへら笑いやがって。今日の試合、絶対ボコってやるからな、覚悟しとけよ。

昼時よりすこし早かったからか、そう長く並ぶ事もなく食事の乗ったトレイを手にし、空いている席を探して歩きまわることもなくすんなり席に着くことができた。

織斑何某は焼き魚定食、ポニテ女子はぎる蕎麦、私はトマトソースのかかったオムライスに、デミグラスソースのかかったハンバーグのセットである。……おい誰だお子様ランチかわいいか言つたやつ。これはお子様ランチではない。普通にメニューにあったオムライスハンバーグ定食だ。なんかあきらかにサンプルより量少ないしおまけでカットオレンジとパックのリングジュース乗ってるし、オムライスになぜか旗立ってるけど断じてお子様ランチではない。

まあいいや、食事にも作ってくれた食堂のおばちゃんにも罪はない。おいしくいただ

くとしよう。

ふむ、ただ単に市販のケチャップをかけたわけではなく、トマトピューレと香辛料でしっかりと作った酸味の効いたトマトソースに、薄焼きでありつつもふんわりとした卵がやさしく舌を包み込む。甘めに仕上げられたチキンライスが酸味強めのトマトソースと合わさることでトマトとトマトという具材被りも気にならない、むしろトマト同士だからこそそのハーモニーを奏でている。うまい。

ハンバーグもジューシーであふれるほどの肉汁をしたたらせているが、濃厚であるがくどくはない絶品のデミグラスソースが合わさり、舌に強烈なうまみを伝えてくる。このデミグラスソースの味、ルーを使っていない……?もしやフォン・ド・ヴォーから自作しているのか、何にせよすごい手間がかかっているのは確実。うまい。

めっちゃうまい。

「ははっ。」

「ふふ。」

「……んみゆ?」

なにやら笑われたので顔をあげてみれば、織斑とポニテ女子がこちらを見て目を細めていた。

なんだ。

「むぐむぐ……んく。なにか?」

なぜそんな「ほほえまー」みたいな顔してるんだ。殴るぞ。もしや口の周りにソースでもついてたか?

……ついてないな。じゃあなに?

「いや、ウオルコットさんってなんていうかき、クラスのみんなも社長令嬢だ最年少代表候補生だつて言つてたから、てつきりもつと、住む世界が違う人なのかなつて思つてたけど。おいしそうに飯食つてる姿は年相応だなつて思つたら急に身近に思えてきて、なんか勝手に話しかけづらいつて思つてたのがバカらしくなつてさ。」

おう、いきなりなんだ。めつちや喋るではないか。私に話しかけてないでさつさと飯食べる。……つてもう食べ終わつてる。はつや。

というか話しかけづらいつてた相手をいきなりご飯に誘うお前の精神構造どうなつてるんだ。コミュ力お化けかよ。

で、隣の貴女は? という意味を込めて視線を向ければ、ポニテ女子もなんか喋りだした。いや、私が催促したんだけども。

「まだ一週間とは言え、常に不機嫌そうで笑つているところなんて見たこともなかったし、クラスメイトが話しかけても事務的に返事をするだけだったし、こちらを見下しているような暗い嫌な目をしていたから、てつきり嫌な奴だとばかり思つていたんだが。

今のお前を見てみると、そういった態度がすべて警戒して気を張っている子猫みたいに思えてきて急に可愛らしく、ふふ、いや、すまない、バカにしているわけではないんだが。」

「あはは、確かに!」

めっちゃバカにしてるだろそれ。おい、笑わずにこつち見ろよおい。おい織斑、笑ってんじやねえぞ、伸すぞこの野郎。確かに、じゃねえよ。事実不機嫌だったんだよ、おなか痛くて。その暗い目つてのは現実に絶望して打ち上げられたマンボウのようになっていた目のことだな。主にお前のせいだぞ織斑。

なんだかふつつと怒りが湧き上がってくると同時に、原作のトラブルメーカーコンビと一緒にご飯を食べてることを思い出したとたんにおなか痛くなってきたじやねえかちくしょう。しかも緩みに緩んでいたであろう巷というメシ顔なるものをがつつり見られたらしい。なんか無性に恥ずかしい。

幸い残りあと一口だけだったオムライスを手早く掻き込み、オレンジとリンゴジュースを引つ掴んでテーブルから離れる。そして二人に指を突き付けて一言。

「こ、この屈辱は今日の試合で晴らさせていただきます!首を洗って待つてなしゃい!」  
「嘘んでない。嘘んでないから。ちよつと発音がネイティブすぎてそう聞こえたただから。」

あっけにとられていた二人をしり目に、脱兎のごとく逃げだすセシリアであった。

あ、オレンジとリンゴジュースは中庭の木陰でいただきました。とてもおいしかったです。